

過去の調査では、トロール漁業を、“混獲”と総称される漁獲対象でない種的大量漁獲や、浅い海底の破壊など大きな環境への影響を関連付けている。米国科学アカデミー紀要に発表された新しい研究によれば、この漁法は、さらに深い海や海を越えて長期的で広範囲に渡る影響をもたらすと言う。



1944年9月日本軍により中国から連れ去られた 劉 連仁(リウ リェン)。苛酷な炭坑労働から逃亡し北海道の山中で一人、13年間生き抜いた魂の記録。

「筆者より」

誰もが戦争の悲劇を語り継ぐことは大切だと思いながら、なぜか加害者としての日本の歴史を語ることは自虐的だと否定されることある。しかし、本来戦争とは互いに殺し殺されるもの、被害者になるのと同時に加害者にもなるのが戦争の本当の姿である。

『生きる』を書いたのは、戦争の犠牲となった数えきれない人たちの一人である中国人・劉さんの物語を通して、その「戦争の本質」を次世代へ伝えたいという思いから。また、命と尊厳を踏みにじられることへの皮膚感覚のような嫌悪感と怒りの共感、何よりなぜそのようなことが起きたのか、事実とその背景にある「社会」を見結める目を、少しでも子どもたちに持ってもらいたい思いがあったから。

歴史を学ぶことは年号や英雄を覚えることではなく、人々がどう生き、何に迷い、何を選び、またどんな間違いを犯したのかを知ることにあるのだと思う。その歴史の一つ一つを直視することで、今と未来を修正していける。そうしていかなければ、あの時私たちは何のために犠牲になったのかと、地の底から問われる気がしてならない。

過去から渡されたパトンを、時代の嵐に巻き込まれ、子どもたちの背中を見失ってしまう前に確かに渡したい。そしてたとえ絶望だらけの世界だとしても、必ず変えていけるのだと信じられる大人と子どもが、共に生きる姿を書いていくことができたかと思っている。

「とまれッ！」と、いきなり、橋の脇からどなり声がした。

見ると、傀儡軍の兵士が四人、黒い銃を構えて立っている。しかもわずかに五、六歩しかはなれていない。

とっさに連仁は身構えた。昨日、村の老人が傀儡軍に捕らえられたという話を聞いたばかりだった。

(これは、まずいぞ)

傀儡軍とは、日本が中国を侵略し、中国の東北部に満州国を建国して以降、日本軍の指揮下におかれた中国人の軍隊のことだった。日本軍の手下となって同じ中国人に銃を向ける兵士を、皆は漢奸(ウラギリもの)と呼んだ。彼らは呼び名の通り、まるで心を捨ててしまったような冷たい目をして、容赦なく引き金を引くことさえあった。

しかし、もっとおそろしいのは日本の軍隊だった。山東省のある部落では、今も日本軍と戦い続ける八路軍の兵士を探して、関わりのない部落の子どもまでもが一人残らず殺されたという。命だけではない、ありとあらゆるものをうばいつくし、最後は部落じゅうに火を放つて、何もかも焼きつくすというのだ。

「東洋鬼」——。中国人は日本人をおそれ、そう呼んだ。

(生きる 劉 連仁の物語)